

カドワースとバークリにおける「思念」について

竹 中 真 也

はじめに

一七世紀から一八世紀にかけてのイギリスの哲学には、経験論のほか別に別の系譜がありうる。それは、プラトン主義あるいは知性主義の系譜である。じつさい、イタリア・ルネサンスに蓄積された古代からの遺産はイギリスにもたらされ、一七世紀にはケンブリッジ・プラトン主義者と呼ばれる一群の哲学者に継承されていた。一八世紀にも、例えば、バークリは『サイリス』（二七四四年）においてプラトン主義（フィチーノによって整備された「古代神学（prisca theologia）」という一連の知的継承を論じたキリスト教護教的プラトン主義）に基づく形而上学を展開したのである。

それでは、ケンブリッジ・プラトン主義者からバークリへと至る、いかなるプラトン主義的な系譜を形成できるのだろうか。本稿は、カドワースの認識論をおもに取り上げ、バークリとの共通点を見いだし、イギリスにおけるプラトン主義の系譜の可能性を探求してみたい。（ただしここでは、物証的な影響関係ではなく、事柄として共通の思想の「類型」を浮き彫りにすることを目指す。）こうして、イギリスの哲学史に流れる地下水脈を探り出し、おくことは、経験論を含めたイギリスの哲学に新たな光をもたらし、従来になかった観点をもたらしてくれるだろう。まずは、バークリの基本的立場を概観し、しかるのちカドワースの認識論を『永遠で不動の道徳に関する論考』（一七三

一年)を軸にして取り上げることにはしたい。

第一節 バークリにおける観念と「思念」

バークリの哲学は、観念と精神の二元論を基礎とする。観念とは、感覚や記憶や想像の対象であり、それは「受動的で不活発 (passive and inert)」である。これに対して、観念を知覚し記憶し想像し意志する能動的な存在者 (active being) がある。それが心、魂、精神などと呼ばれるものである (以下、精神と略記)。『人知原理論』の初版はこうした観念の受動性と精神の能動性を軸に議論が展開された。しかし、『人知原理論』第二版 (一七三四年) から、バークリは新たな術語を追記した。それが「思念 (notion)」である。例えば、以下のように、バークリは言う。

われわれは自分自身の存在を内的な感じあるいは反省によって理解し、他の精神の存在を推論によって理解する。われわれは自分自身の精神に関して、すなわち魂や能動的な存在者に関してある知識すなわち思念をもつと
言うことができるであろう。しかし、それらに関してわれわれは厳密な意味では観念をもたない。(PHK 89)

「私の精神」という言葉や「観念についての私の精神の働き」という言葉によって意味されていることを私が知り理解している限りで、私はそれらに関するある知識すなわち思念をもっている。(PHK 142)

つまり、「心、魂、精神」という能動的な存在者」という精神的な実体、さらに「意志する、愛する、憎む」という精神の働き」の認識には観念ではなく「思念」を用いるべきだとバークリは言う。これらは能動的なものだからである。そしてこれらの思念は「反省」によって、あるいは「内的な感じによって」認識されると言われている。しか

し、それだけにとどまらず、バークリは、次のような一文をあえて付け加えている。

さらに注意すべきだが、あらゆる関係 (relations) は精神の能動的活動を含むので、事物の間の関係や関連については、観念でなくむしろ思念をもつと言わねばならない。(PHK 142)

すなわち、「思念」には「関係」も含まれるのであり、その根拠は、関係には能動的活動が含まれるからである。とはいえ、バークリは追記ということもあつてか、なぜこうした一文を付け加える必要があつたのか、あるいは、「関係」にはいかなるものがあるのかについては、これ以上ほほ語っていないのである。

このように、バークリは観念でも精神でもない「思念」を導入した。しかも、バークリは『人知原理論』序論で抽象に基づく思念ないし概念の形成を否定した上で、上記のような「思念」をあえて論じたのである。なお、バークリ最晩年の著作『サイリス』(一七四四年)において、「思念」は「イデア」と言い直され、想起説とともに論じられることになる(1)。以下では、こうしたバークリの「思念」を念頭に置いて、カドワースの認識論を見てみよう。こうして、カドワースとバークリに通底する思想的な特徴を解明してみたい。まずは、カドワースの議論の前提ともなる原子論から始めることにしよう。

第二節 カドワースにおける原子論と感覚的知覚

(一) 有神論と原子論

カドワースが、論敵の一人としたのはホップズであった。その原子論がはらむ無神論的な傾向にカドワースや当時の人々は気付いていた。しかしながら、だからといって、カドワースは原子論を全面的に否定したわけではない。原子論には二種類あるからである。

カドワースとバークリにおける「思念」について(竹中)

レウキッポスやデモクリトス以前に、原子論はそれ自体で哲学全体を占めていたわけではなく、むしろ哲学的体系全体の部分ないし一部、しかももつと卑しい低級な部分ともみなされていた。というのも、それは世界の純粹に物體的なものだけを説明するために用いられたからである。それに加えて、「いにしへの」原子論者は他のものを認めていたのであり、それはたんなる嵩や機構ではなく、むしろ生命や自発的活動、すなわち、非質料的で非物體的な実体である。その上部つまり頂点とは「物體的」世界から区別される神である。(TIS 1 34)

カドワースは、古代の哲学者の証言に基づいて、原子論をデモクリトス以前に遡れると論じている⁽²⁾。カドワースの見立てでは、もっぱら原子のみが世界を構成し、原子に基づいてのみ万象が説明される哲学は、レウキッポスやデモクリトス以降のものであつて、彼らの無神論的原子論がホッブズに引き継がれた。しかし、本来、原子論はそうしたものではなかった。カドワースによれば、原子を扱うのは物体に関わる哲学のみであり、それとは別の対象を哲学は本来含んでいた。その別の対象とは「非質料的で非物體的な実体」である。それでは、こうした指摘は、いかなる論拠に基づくのか。その論拠は、デモクリトス以降の原子論のように、原子の運動や衝突だけから、生命や自発的な機構が生じることは理解できないからである。すなわち、「より大きな完全性、つまりより高次の存在者が、より少ない完全性やより低次の存在者から生じたり上昇したりすることは不可能である」(TIS 3 57)。つまり、結果には原因に存するものしか含まれていない。したがつて、「宇宙において、事物はより低い完全性からより高い完全性へと高まり上昇し登るのではなく、反対に、より高い完全性からより低い完全性へと下降しすべり落ちたのである」(TIS 3 57)。かくして、カドワースに言わせれば、原子論は無神論をただちに帰結するわけではない。むしろ、原子のほうが、生命や魂(形成的自然)や理性ないし知性などよりもあとで——事柄として「あとで」——生じることになる。こうした有神論的な原子論を前提として、カドワースは認識論を展開しているのである。まずは感覺的知覚がいかにして生じるのかを見てみよう。

(二) 感覺的知覚

さて、動物であれ人間であれ、感覺的知覚の出発点は、原子の運動である。カドワースは以下のように言う。

……第一に、感覺が受動 (passion) (2) であることは万人によって認められている。しかも、次のことは議論の余地のないことである。あらゆる感覺においては、最初に感覺能力をそなえた物体〔身体〕の受動がある。そして、そうした物体の受動とは、外部の対象から神経に刻印され、神経から脳に伝搬され伝達され、脳であらゆる感覺が作られるという、場所的運動にほかならない。(EIM 3. 1. 2. 傍線の強調は引用者)

例えば、澄んだ夜空に見える恒星がどれだけわれわれからかけ離れていようと、その恒星からの原子の「場所的運動 (local motion)」の伝達が、われわれの視神経や脳に到達する (EIM 3. 1. 2)。これが感覺の最初の段階であって、このままでは物理的運動の伝達である。しかし、動物の場合、感覺には「生命として知覚し意識すること (vital perception and consciousness)」(EIM 3. 1. 3.) が伴う。このとき、魂における「別の種類の受動 another kind of passion」(EIM 3. 1. 3.) が生じている。すなわち、「魂が生命として (vitality) 合一してゐる物体〔身体〕にかくかくの場所的運動が刻印されると、魂は自分自身のうちに、しかしかの認識をするよう決定される」(EIM 3. 1. 4.)。カドワースによれば、この感覺は「外部から魂に押し付けられた、ある種の鈍く混乱し愚かな知覚であらう」(EIM 3. 2. 1.)。感覺は、身体における変化や運動を知覚し、周囲に存在している個体的な物体を把握するものの、「その諸物体が何であるかを明晰に理解することもなければ、それらの本性を洞察することもない」(EIM 3. 2. 1.)。魂の受動は、より低級で、共感的な部分において生じ、外部から影響を被るもので、これは動物的な魂の意識である。しかしながら人間の魂には、より高級で「能動的 (active)」な部分があり、これは物体から切り離されて働き、非受動的である。これが、to noetikon つまりは認識し理解するものである。「……認識することや知覚することは、自分自身によって、また自ら独力で働く、魂のうちのより高級な部分による、明晰で、清澄で、非受動的な知覚で

あ」(EIM 3. 2. 2.) する。つまり魂には、受動的な部分と能動的な部分がある。そして、この能動的な部分が知性ないし理性であり、そこにおいて普遍的な知識が認識されるのである。

第三節 知性的な認識

(一) 生得説による知性認識

さて、カドワースによると、理性ないし知性は抽象的で普遍的な対象を認識する。つまりわれわれは理性ないし知性によって真知 (knowledge) をもつ。古代以来の *doxa* と *episteme* の対比を念頭において、カドワースは感覚的知覚と知性的認識を対照的に扱う。

では、知性認識はいかにして行われるのか。カドワースは抽象的 (*abstract*)⁽⁴⁾ という言葉を用いるが、例えばトマス・アクイナスのように、受動知性や能動知性を想定して、物体の質料を切り離して形相を受動知性が受容し、能動知性がそれを現実化するというわけではない。カドワースに言わせれば、それは「能動知性の奇妙な化学」(EIM 4. 1. 1.) である (カドワースに言わせれば、彼らはアリストテレスを誤解した)⁽⁵⁾。あるいは、ロックのような抽象説を採用するわけではない。そうではなく、カドワースは生得説を採用し、自らの立場を語源に触れながら説明する。

認識することや知解すること (knowledge and Intellection) は、離れた事物に対面すること (あるいはラテン語で言えば) *prospicere* (「離れて見ること」) ではなく、自分が知っている事物を反省することであって、語源にしたがえば、知性 (*intellectus*) はまさに自分自身の内部の書かれた文字を読むのである (「ラテン語で言えば」) *in interioribus legere* (「内部で読む」) である⁽⁶⁾。つまり知性は、自分自身のうちで自分に基づいて自らの対象を把握するのであり、知性はその対象と同一である⁽⁷⁾。(EIM 3. 3. 4.)

さて、この部分は一見すると、記憶の対象のように、文字が知性のうちに書き込まれていると解釈されるかもしれない。もしそうなら、カドワースの立場はいわゆる素朴生得説と呼ばれるものになる。しかし、カドワースの他のところでの言葉からして、また研究者たちも言うように、やはりこの部分を文字通りに受け取るべきではない（Hutton (2012) 10, Stanciu (2005) 852）（つまり、「文字」がわれわれの精神に刻み込まれているわけではない。むしろ、感覚知覚が喚起するのは、われわれの「能動的活動 (activity)」のみである。しかしながら、もしそうだとすれば、この活動だけでは、われわれはまだ普遍的対象を得ていないことになる。それでは、普遍的対象はいかにして得られるのか。それは、カドワースによれば、われわれの魂の「能動的活動」が、完全で無限で永遠な神の精神にアクセスすることによる。つまり、マールブランシュと大枠としては同様に、われわれの不完全な知性は神の知性に与かる (participation) 「分有する」ことによって普遍を手にする。しかし、だからといって、ただちに完全な真理に至ることができないわけではない。カドワースはこの点を以下のように言う。

さて、不完全なものすべて、同じ種類の完全なものに依存しなければならぬので、以下のようなことになる。すなわち、われわれの個別的で不完全な知性は、そのうちにじつさに事物の理法 (rationes) やその真理をかならずしも含んでいるわけではない。その知性は、多くの場合、無知であり、疑い、間違えるのであって、議論し推論することによって、あるひとつのことから別のことへとゆっくりと進んでいくのである。したがって、その「人間の不完全な」知性は、完全で、無限で、永遠の知性（神の知性）を派生的に分有しているにちがいない。というのも、その知性の中には、すべての事物の理法とすべての普遍的な真理がつねに現に (actually) 理解されているからである。この考察はあまりにも明白で避けられないものなので、アリストテレス自身もそれを見逃すことができなかったのである。（EM 4.4.11. 傍線の強調は引用者）

カドワースは participation ないし partake という言葉を用い、神の精神と人間の精神の関係に基づいて、知性認識

の成立を説明する (Cf. EIM 1. 3. 7, 4. 2. 16, 4. 4. 7, 4. 4. 12, 4. 6. 7)。「天使であれ人間であれ、被造物の中にあるすべての知識と知恵は、その唯一の永遠で不変で創造されない神の知恵を分有することにほかならぬ」(EIM 1. 3. 7.)のである。しかしながら、「派生的に分有」すると言われていたように、人間の不完全な知性はおのおの、まったく同じ仕方でも神のうちにある原型に触れるわけではない。ちょうど同一の事物が、ガラスの歪みやその置かれた位置に応じて、各々映し出されるように (Cf. EIM 1. 3. 7.)、人間の知性は、その不完全性や個別性のゆえに、同一の明晰判明な普遍の対象を同じ仕方でも手にするわけではない。この意味で、われわれにおける普遍の対象は「模造的 (ectypal)」(TIS 3. 415, EIM 4. 1. 5, 4. 4. 7, 4. 4. 11, 4. 4. 12.)であり、神の「知性の様態 (modification)」である (様態については以下でやや詳しくふれる)。とはいえ、それでも、ガラスに映るものがどれほど異なろうと同一の対象がそこに映し出されているように、神の知性はわれわれにとって共通の認識を保証する場にほかならない。つまりジルの言葉を借りれば、「神の精神は、あらゆる人々が合理的に思考する公共的な領域 (public area) である」(Gill 2004) 163) ⁽⁹¹⁾。

こうして、「自分自身の内部の書かれた文字を読む」という上記の不用意な言葉とはうらはらに、生得的な文字が精神ないし知性に刻み付けられているわけではない。ハットンも言うように、カドワースにとって「精神は、知識を獲得する生得的な傾向を有し、観念を生成することに「われわれの」精神が能動的な役割を果たす」(Hutton 2013) 10) である。したがって、カドワースにおける知性ないし理性 (Intellect or Reason) ——カドワースはこれらの語を明確に区別して用いていない——はたんなる推論機能 (discursive faculty) にとどまらない。それは神の精神という場にアクセスし永遠の対象を分有する機能、「ヌース (nous) すなわちメンス (mens)」(Stanciu 2005) 860) に対応するとも言うことができる。われわれの能動的な働きと神の精神の協働がわれわれにおける普遍的な知識を成り立たせるのである。また、このように神の精神を派生的に分有することによって普遍的知識を手に入れることは、「想起 (remniscence)」(EIM 4. 1. 2.) と呼ばれる「想起」と呼べるのは、事柄として、神の精神という「より先なるもの」にアクセスするからである。かくして、カドワースは想起説に与するのである。

(二) 生得的な「能動的活動」と「関係」

それでは、知性的な認識は個々の場面ではいかにして説明されるのであろうか。そのことを具体例とともに見ていきたい。カドワースは生得的という形容詞を「能動的活動 (activity)」や「活動 (energy)」や「力 (power)」という名詞につけるものの、パスモアも指摘するように、生得観念や生得思念という不用意な言い方はしていない。とはいえ、生得的な「能動的活動」から得られる観念ないし思念には次のようなものがあるとカドワースは言う。

精神のうちには、外部の可感的な対象から精神に押され刻印されなかったもので、したがって、精神それ自体の生得的な活動や能動的活動から生じるにちがいないいくつかの観念があることは明白である。……〔第一に〕例えば、知恵、愚劣、賢慮、軽率、知識、無知、真実、誤謬、徳、悪徳、誠実、不実、正義、不正義、思考、それどころか、感覚〔作用〕それ自体……さらに、それらにおける思考作用を含む思念、あるいは、思考する存在者のみを指し示す思念、その他にも多くの思念がある。第二に、互いに比較する精神の活動からもつばら生じる、非物体的な事物にも物体的な事物にも属する、多くの関係的な思念や観念がある。例えば、原因と結果、手段と目的、秩序と比率、類似と相違、等と不等、適正と不適正、均衡と不均衡、全体と部分、種と類、等々である。(EM4.2.1. 傍線の強調は引用者)

第一に「思考する事物それ自体」についての思念と、形容詞の名詞形で示されたさまざまな状態（知恵、愚劣、賢慮、軽率、知識、無知など）がある。これは一つのものについての認識であると言うことができるだろう。第二に、原因と結果、手段と目的等々の「論理的で関係的な思念、観念」（以下、関係の思念と略記）がある。こちらは、複数のものを「比較」することによって得られる観念である。このようにカドワースは、二種類の思念をあげているが、しかし、むしろ関係の思念のほうを重点的に説明している。また関係の思念こそわれわれの精神の「能動的活動」にとって枢要であると思われる。したがって、ここでも関係の思念を軸にして、いかにして普遍的知識が個々の

場面で成立するのを見てみよう。また、カドワースは関係の思念を説明するにあたって、時計を例にあげているから、ここでもそれに注目することにしよう。

さて、時計とはいかなるものであるか。こうした問いに対して、カドワースは、従来のように、形相と質料、実体と属性という枠組みをもちいて答えていない。そうではなく、カドワースは、時計の本質を知るには、それに含まれている種々の「関係」が理解されなければならないと言う。すなわち、「この時計の真の本質は、まさに複合的であって、その構成要素としてのさまざまな関係から成り立つ。したがってその本性は、諸関係なしには理解されえないのである」(EM 4.2.8)。この文言からすれば、時計の部品一つ一つを見ている時計の本質は認識することができない⁽⁹⁾。そうではなく、その部品のあいだの原因と結果、秩序と比率、適正と不適正、部分と全体、手段と目的等々の諸関係をわれわれの精神の「能動的活動」が見いだそうと努力し、その結果得られた多様な諸関係を「統一」するとき、時計の本質ないし本質が理解されるのである。これは、諸関係の関係を把握して、それを一つにまとめ上げること、事物の認識が成立することである(カッシーラーの実体概念から関係概念への先駆けとも言えるかもしれない)。とはいえもちろん、いまだわれわれが見いだしていない「関係」もありうるがゆえに、時計の完全な本質つまり神のうちにある「原型」には至ることはできない。それでも、関係を探求することによって、時計の本質に肉薄ないし接近していくことはできる。しかるに、こうした諸関係を見いだそうとすることは、われわれがある部分を別の部分と比較して関係づけ、ることによる。とすれば、関係は、関係づけるといふ作用に基づいて認識されることになる。カドワースは、宇宙ないし世界についても同様であると考え、恒星、太陽、月、山、谷、川を別々に眺めても、cosmos ないし mundus は理解されえないと言ふ。cosmos や mundus がいかなるものかを理解するためには、調和や対応や秩序を発見しようと努力する必要がある。このように、自然物にも人工物(時計)にも関係を見いだすことができる述べたのちに、カドワースは以下のように言ふ。

以上のことから、われわれは次のことを論証的に示した。すなわち、いかなる物体的な複合物も、感覚によって

理解されることはないし、また、その〔本質的な〕観念が外の対象から受動的に心に刻印されることもない。むしろ、それはただ知性の主要な統一的な力 (the large unitive power of Intellect) によつてのみ理解され、その生得的な活動から顯示されるのである。(EIM 4. 2. 11. 傍線の強調は引用者)

まさに関係は「知性の主要な統一的な力 (the large unitive power of Intellect)」(EIM 4. 2. 11. 傍点の強調は引用者) によつて成立する。あるいは、カレも言うやうに、「意識の統一する能動的活動 (the unifying activity of consciousness)」(Carre (1953) 348) を関係は含むのであつて、関係の思念は作用面こそ強調される。あるうは、パスモアの言葉を借りれば、「体系化の能動的活動 (an activity of systematizing)」(Passmore (1951) 36-37) に基づいて関係は認識されるのである⁽⁹⁾。

さて、関係の思念には「能動的活動」つまり「意識の統一する能動的活動」ないし「体系化の能動的活動」が含まれているのであるが、このことから引き出されたのは、カドワースが関係の思念を対象としてではなく、むしろそれが作用ないし活動であることを強調していることである。「知性は自分自身のうちで、自らに基づいて自らの対象を把握するのであつて、知性はその対象と同一である」(EIM 3. 3. 4. 傍点の強調は引用者) とカドワースが言うとき、このことは、関係の思念が彫像や絵画のように死んだ対象ではないことである。この世界には理法、本質、真理があると述べたのち、それが能動的活動と関係することについて、カドワースは以下のように述べている。

事物について必然的に存在する永遠の理法 (rationes)、本質、真理があると肯定することと、無限で全能で永遠の精神が必然的に存在し、つねに自分自身や、万物の本質や、それらの真理を現に (actually) 理解していると言ふことは同じことである。いや、むしろ、その無限で全能で永遠の精神こそが、万物の理法、本質、真理なのである。というのも、事物の理法や本質は、彫像や、世界のどこかでそれだけで吊るされている多くの肖像や絵画のように、死んだものではないからである。真理もまた、本の上にインクで書かれたたんなる文章や命題

ではない。それらは生きたものであり、精神や知性の様態にはかならないのである。したがって、第一知性は本質的かつ原型というありかたで、すべてものの理法や真理であり、あらゆる個別的で創造された知性は、それ〔第一知性〕を派生的に分有したものにすぎないし、それらは模造的な同じ特徴を押印されているのである。(EIM 4. 4. 7. 傍線の強調は引用者)

ここでの「精神や知性の様態」は「われわれの精神や知性の様態」ではない。「神の精神や知性の様態」と理解されるべきである (Cudworth (1731) intro. xxiv, Passmore (1951) 37)。とすれば、以下のようになる。すなわち、神は永遠の理法や真理を現に (actually) 認識してゐる。神のうちにあるこうした一つの永遠で不動な知的活動(つまり理法や真理を全体にわたって関係づけているという活動)が、個々の知性においてはその「様態」として、あるいは「模造」として、限定され具体化されたものとして現れてくる。この意味で、われわれの知性は、神の知性の能動的活動に派生的な分有 (derivative participation) を行うことで、感覚において普遍的対象を認識するのである⁽¹⁾。「知性とその認識対象 (Intellect and the thing known) は、真に同じ一つのものである。というのも、知性作用の対象は、精神それ自体の様態 (modification) だからである」(EIM 3. 3. 4)とアリストテレスの權威に基づいてカドワースが言うとき、これは、その関係づけ、という統一的活动の側面を強調して読まれるべきなのである。

むすびとして——哲学史の観点から

さて、以上のように、知性はその能動的活動に本領があり、そしてそれが感覚的对象を関係づけているとき、その対象が何であるかが認識されるのだとすれば、認識の成立の主導権は、外界ではなく精神の側にあることになる。この意味で、カドワースの認識論はのちのカントを思い起こさせる。事実、古くからこの類似点は指摘されてきた (Albee (1924) 267)。Albeeによれば、カントへの直接的な影響関係はないにしても⁽²⁾、のちの哲学者に一定の影

響を及ぼしたとも言えるだろう。

最後に、本稿の所期の目的、カドワースの認識論からバークリにつながるある系譜を見いだしておきたい。これまでのカドワースの生得説を踏まえてバークリの「思念」をふり返ると、いくつかの共通点、あるいはこう言ってよければ、プラトン主義的な特徴が見いだせる。まず、バークリの「思念」とカドワースの「思念」には同様な分類が見いだされた（能動的な存在者やその作用」と「関係」）。また、バークリもカドワースも、抽象することで「思念」を形成するのではなく、「反省」に基づいて「思念」をもつと論じていた。さらに、「思念」には能動性が含まれることも同様である。これらは両者に見て取れる共通点である。パスモアも、興味深いことに、バークリにおける観念と「思念」の対比を参照しながら、カドワースの感覚と思念の対比を解説している（Pasmore (1951) 32）。また、バークリは「思念」を『サイリス』において想起説（*anamnesis*）に基づいて議論している（拙論、竹中（二〇二二））。同様にして、カドワースは、生得的な「能動的活動」が普遍的対象を手にすることを想起説として論じているのである。もちろん、こうした共通点はあるものの、いまだ確認されていない点もある。それは、神の精神とわれわれの精神の関係である。カドワースは分有という言葉を用いていたものの、バークリの『人知原理論』にはこうした説明はない（本稿、第一節）。とはいえ、この点についても、まったく手掛かりがないわけではない。じつや、パスモアも指摘するように、バークリは「神の精神における観念」を「原型」（DHP 3 248, 254）と呼び、われわれの心にはその「模造」があると論じたこと（Pasmore (1951) 37）あるいは、それとともに、バークリの愛唱句「われわれは神において生き、動き、存在する」（『使徒行伝』第七章）は、カドワースと同様な議論の可能性を示唆しているのかもしれない。この問題を明らかにすることによって、カドワースからバークリへというある種のプラトン主義的な系譜もいっそう明確になることだろう。とはいえ、このことを確かめるには、バークリにおける、神の精神とわれわれの精神との関係を検討しなければならないが、そのことについては稿を改めたい。

*カドワースの文献は、『宇宙の真の知的体系』については、Cudworth, R. (1678). *The true intellectual system of the universe*.

wherein all the reason and philosophy of atheism is confuted, and its impossibility demonstrated, with a treatise concerning eternal and immutable morality: to which are added, the notes and dissertations of Dr. J. L. Mosheim, translated by J. Harrison 3vols., London, Printed for T. Tegg, 1845を参照した。また『永遠で不動の道德に関する論考』は次の著作を参照。Cudworth, R. (1731). *A Treatise Concerning Eternal and Immutable Morality and a Treatise of Freewill*, edited by S. Hutton. Cambridge: Cambridge University Press, 1996. 引用のxviには、『宇宙の真的知的体系』の場合には、『全集の巻数とページ番号を』『永遠で不動の道德に関する論考』の方は、巻数と章数と節数を書いた。また、慣例に従い、以下のような略記号を用いた。

『宇宙の真的知的体系』：TIS

『永遠で不動の道德に関する論考』：EIM

バークリからの引用はすべて以下のテキストに基づいている。The Works of George Berkeley Bishop of Cloyne, 9 vols., ed. by Luce, A. A. and Jessop, T. E., London, Thomas Nelson and Sons, 1948-1957. 引用のxviiは、『人知原理論』についてはセクシヨン番号を、『ハイラスとフィロソフスの三つの対話篇』については対話番号とページ番号を示した。ここでは慣例に倣って以下の省略記号を使用した。

『人知原理論』：PHK

『ハイラスとフィロソフスの三つの対話篇』：DHP

〔付記〕

本研究は、二〇一九年度～二〇二一年度科学研究費補助金若手研究「イギリスのプラトン主義の系譜―バークリとケンブリッジ・プラトニストの比較研究」(課題番号19K12972、研究代表者：竹中真也)の成果の一部である。

注

- (1) バークリが『サイリス』において論じた思念については、拙論(竹中(二〇二二))を参照していただきたい。
- (2) ストラボン(Geography (『地理誌』) XVI Ch. 16 S. 24(C757) Strabo, *Geography*, books 1-17 in 8 volumes (Loeb Classical Library)に書かれていることをカドワースは参照し、原子論の起源をデモクリトス以前のモコス(Mokos)に帰する。つまり原子論は、トロイア戦争以前に生まれたシドン人のモコスによるとする(この人物については、ディオゲネス・ラ

- イエルティウスも『ギリシア哲学者列伝』の開巻直後で言及している。そしてカドワースはこのモコスこそモーゼであると解釈して、モーゼを有神論的原子論者と理解し、その学説がピュタゴラスからプラトン（『ティマイオス』）などギリシアの哲学者へと伝達されたと言う（TIS 120-21）。
- (3) もちろんこの原子の運動の受動の結果として、情念 (passion) も生じる。
- (4) 学問はアリストテレスを参照しながら、以下の三つに分類されている (TIS 289-90)。自然学 (Physiology)、幾何学ないし純粹数学 (Pure Mathematics)、神学ないし形而上学 (Theology or Metaphysics) である。自然学は「質料から分離不能であり可動的である」。幾何学ないし純粹数学は「じっさいのところ可動的でないものであるが、それ自身で存在するためには真に質料から分離不能である」。第三に、「不動で質料から分離可能である」、すなわち「非物体的な不動な実体」に関わる (TIS 289)。こうした分類はトマスにも見いだされるが、ここでは「分離可能」や「分離不可能」という観点から「抽象」が論じられているのであり、受動知性や能動知性のことが念頭に置かれているわけではない。
- (5) 「カドワースの立場は、アウグスティヌスの教説や彼の中世の学説に似ているが、その淵源はプロティヌスにある」(Carré (1953) 348)。したがってカドワースの立場は新プラトン主義的とも言える。
- (6) 知性の対象は、離れたところではなく、自分自身の内にある。感覚知覚が外部から直線的に起こるのに対して、知性認識は「おのれ自身のうちにとどまり続ける円」(EIM 3.3.4) になぞらえられるのである。これが「反省」のイメージである。
- (7) 「カドワースとモアは明らかに経験に先立って精神に内在する観念を否定している。生得的なものとは感覚的経験を機縁として喚起される能動的活動である」(Stanciu (2005) 852)。
- (8) じっさいカドワースは次のように言う。「このことから、すべての知性は、万物をそれによって理解するための形相や観念をたえずそなえていて、それによって、普遍的な知識の種 (seeds) が一度にいたるところで押し付けられるがゆえに、互いについてまったく明晰な概念を理解することができるだけでなく、同じ事柄についてまさに同じ観念をもつことになるのである」(EIM 4.4.12)。
- (9) 「知識は判断(感覚はそれを与えることができない)、普遍性、そして必然性を要求する」(他方で、感覚はわれわれに個別性と偶然性しか示さない)」(Stanciu (2005) 851)。
- (10) 関係は能動的な作用を含むのである。こうした関係の認識は、人工物だけでなく自然物にも可能である。関係はたんに任意の偶然的なものではない。(EIM 4.2.11)。

カドワースとバークリにおける「思念」について(竹中)

(11) もしカドワースの立場がそうしたものだとすれば、これはマールブランシュの「神において万物を見ること (We see all things in God)」と類似していると思われるかもしれない。しかしながら、マールブランシュの場合、この神の睿智的延長のもとで数学的な認識が成立するのに対して、カドワースのそれは関係概念であり価値である。これは、カッシーラーの主張を思い起こすなら、デカルト由来の数学重視のプラトン主義と、『テイマイオス』に重点を置くプラトン主義との対比とも言えるかもしれない。あるいは、物体ないし身体の因果関係にも神の介在を認めるのが機会原因論であるが、カドワースではそうはなっていない。ともあれ、このカドワースの立場は機会原因論に類似したところがあるとしても、それとは一線を画すると言えぬであろう。

(12) カドワースの著作が直接的にカントに影響したわけではなく、ライプニッツを経由していたのではないかと推理される (Albee (1924) 268)。

参考文献

- Albee, E. (1924). 'The Philosophy of Cudworth', *The Philosophical Review*, May, Vol. 33, No. 3, pp. 245-272.
- Carré, M.H. (1953). 'Ralph Cudworth', *The Philosophical Quarterly*, October, Vol. 3, No. 13, pp. 342-351.
- Gill, M.B. (2004). 'Rationalism, Sentimentalism, and Ralph Cudworth', *Hume Studies*, April Volume 30, No. 1, pp. 149-181.
- Hutton, S. (2012). 'From Cudworth to Hume: Cambridge Platonism and the Scottish Enlightenment', *Canadian Journal of Philosophy*, Vol. 42, No. S1, pp. 8-26.
- Leech, D. (2017). 'Cudworth on Superintellectual Instinct as Inclination to the Good', *British Journal for the History of Philosophy*, 25 (5), pp. 954-970.
- Passmore, J.A. (1951). *Ralph Cudworth, An Interpretation*, Cambridge.
- Rodney, D. M. (1970). 'A Godly Atomist in Seventeenth Century England: Ralph Cudworth', *The Historian*, February, Vol. 32, No. 2, pp. 243-249.
- Stanciu, D. (2005). 'Rational religion and toleration: Ralph Cudworth and other Platonists', *Studia Politica: Romanian Political Science Review*, 5 (4), pp. 849-863.
- Strabo, (1917). *Geography*, Trans. by Horace Leonard Jones, A.M., books 1-17 in 8 volumes, Loeb Classical Library.

竹中真也(二〇二二)、「『思念』と『イデア』——18世紀におけるプラトン主義の受容の一側面——」、『紀要哲学』第六三号、中央
大学文学部、七五—九四頁。

カドワースとパークリにおける「思念」について(竹中)